

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 12 日現在

機関番号：25407

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2011～2013

課題番号：23653256

研究課題名(和文)戦前の台湾文化交流史を背景地とした戦後沖縄児童文化・文学の展開と全体像の解明

研究課題名(英文)A study to describe perspective and development of the children's culture and literature of post-war Okinawa;Following a background of Taiwan under Japanese rule.

研究代表者

斎木 喜美子(Saiki, Kimiko)

福山市立大学・教育学部・教授

研究者番号：30387633

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円、(間接経費) 780,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は歴史的資料の分析をもとに沖縄の児童文学の動向を明らかにすることにある。とりわけ本研究では、戦前の八重山と台湾の文化交流を背景とした戦後沖縄での展開過程に焦点をあてた。3年間の研究成果は以下の通りである。

まず初めに川平朝申、古藤実富や儀間比呂志の作品リストを作成し、次に彼らによって書かれた子どものための文学作品の特徴を明らかにした。以上、今後の戦後沖縄児童文学研究進展のための基盤づくりができたことを踏まえ、当初の計画通りの成果を上げられたものと考えます。

研究成果の概要(英文)：The aim of study is to reveal the trend of children's literature in Okinawa on the basis of analysis of the historical sources. Focusing on the trend which leads to the postwar period of Okinawa on the background of prewar cultural exchanges between Taiwan and Yaeyama region. The results of the 3-year study are as follows:

First, I created the work list of Tyoshin Kabira, Sanefu Koto and Hiroshi Gimain children's literature. Next, I analyzed the history and characteristics of works written by Tyoshin Kabira, Sanefu Koto and Hiroshi Gima in children's literature. It can be thought that results so far have been going according to my original plan, and I am continuing to carry out my work based on the research foundations that I have created for promoting the study of children's literature in post-war Okinawa.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育学

キーワード：戦後沖縄 児童文化 児童文学 川平朝申 古藤実富 儀間比呂志

1. 研究開始当初の背景

筆者は、これまで全く未開拓で、先行研究もほとんどなかった近代以降の沖縄児童文化・文学史研究に関する論考を重ねてきた。本研究に取り組みはじめた背景には、戦後沖縄の児童文化・文学復興を担った人々が、何らかの形で占領下の台湾との文化交流をベースにしていたことがあげられる。

これは、本研究課題に着手するに先だって実施した課題、「戦前・戦中・戦後の児童雑誌掲載作品に見る山之口獏、伊波南哲の児童観の解明」(挑戦的萌芽研究、課題番号：20653059)に取り組んでいる過程で、新たに鮮明化してきた課題でもあった。

具体的に述べると、伊波南哲が終戦後に郷里八重山に引き揚げてきた後、台湾から引き揚げてきた文化人たちとともに児童文化活動を展開していたことへの注目であった。戦後5~6年の同時期は、後年「八重山ルネッサンス」とも称されているが、筆者は沖縄本島のさらに南西、台湾国境近くの離島である八重山で、このような文化運動が興ったことに興味を抱いた。

なぜ八重山だったのかを含め、戦後初期の混沌とした児童文化状況を解明し、その後の展開過程を具体的な人物や作品に焦点化して明らかにできれば、沖縄児童文学の空白期を埋めるだけでなく、沖縄学における教育や文化、子どもの問題に言及し、新たな研究視点を付与できる可能性があると考えた。これが、本研究に取り組むに至った学術的背景であった。

2. 研究の目的

前述の通り、本研究の目的は戦前の台湾と沖縄、とりわけ八重山地方との文化交流史を背景地とした、戦後児童文化・文学の沖縄からの発信と展開過程の実態、さらにはその全体像を描こうとするものである。

したがって本研究では、まず第一に戦後初期の児童文化・文学復興を担った人々の中でも、戦前に渡台経験のある児童文学者に着目し、彼らの台湾での具体的活動の内容を調査し明らかにしたい。また台湾で発表した作品があればその書誌を作成し、事実関係を明らかにする。

次に彼らの仕事が戦後沖縄児童文化・文学史に持つ意味について作品分析だけでなく、彼らの生育史、教育状況と時代背景、台湾での蓄積等を基軸に解明することを目的としている。さらに具体的に述べるならば、以下の3つの柱にそって研究を行うものである。

終戦直後の八重山文芸復興期(いわゆる八重山ルネッサンス期)における児童文化・文学の実態を明らかにする。八重山では終戦直後、台湾や本土からの引き揚げ者と地元の文化人たちが出版ラッシュを引き起こしていた。地元発行の新聞や雑誌、文献等からその内実を具体的に示

したい。

戦前における台湾の新聞や雑誌等の調査を行い、当時の文化状況についての知見を深める。また、川平朝申(1908 - 1998)や古藤実富(1906 - 1961)に関しては、それぞれ「台湾ラジオ新聞」や「台湾日日新報」に作品を発表していたという情報を得ている。これらの記事を特定するとともに、作品を入手する。

具体的に想定している人物は川平朝申と古藤実富であるが、彼らの児童文化に関わる仕事の内容を明らかにし、台湾時代の成果も含めた全体像を構築する。

戦後、川平はおもに文化行政に関わり、古藤は出版業と教育に関わりながら児童文学作品を執筆している。書誌を明らかにすることに加え、彼らのライフサイクルや交友範囲も視野に入れつつ作品分析を行い、作品の主題や思想、表現上の特徴などを明らかにしたい。

3. 研究の方法

おもに文献研究と聞き取りを含む調査研究であるが、以下の3つの側面からの課題追求を行う。

終戦直後の八重山における児童文化・文学活動の調査

八重山諸島石垣市内の図書館、博物館、資料館を調査し、当時のガリ版教科書や児童雑誌の原本を複写するとともに、歴史資料館の崎山貢氏に聞き取り調査を行い、資料の背景について知見を深める。

戦前・戦中の児童雑誌の調査と資料発掘

台湾及び沖縄本島の図書館や資料館を中心に戦前と戦後に渡わたる作品調査を行う。また古藤実富の三男・光彦氏および川平朝申の弟・朝清氏にコンタクトを取って聞き取り調査を行う。とくに光彦氏からは未刊行の原稿資料を提供いただいたため、その作品分析と考察をまとめたい。

川平と交流のあった沖縄出身の絵本作家・儀間比呂志についてもあわせて作品研究を行い、川平との共著である『ねむりむしじらあ』(福音館書店、1970年)を含め、両者の作品書誌をまとめるとともに、それぞれの作品の文学的特徴、作品背景にある主題や思想についても考察する。とりわけ儀間作品は絵本でもあるため、観賞の方法についても実践し、その成果と課題をまとめる。

以上の研究方法によって、本研究課題を深めるとともに、戦後の児童文学史の全体像を描くために関連項目についても追加調査を行い、さらなる研究課題の発掘を目指したい。

4. 研究成果

3年間で計画した研究課題は、概ね順調にまとめることができた。おもな研究成果は以下の通りである。

第一回の台湾図書館調査、八重山調査を行うことができ、川平朝申の台湾文壇での活動内容を具体的に明らかにし、作品の書誌作成や複写を含め、基礎史料を蓄積できた。具体的に述べると、「台湾日日新報」では、彼がラジオ劇の脚本執筆や演出に関わっており、児童向けの読み物や挿絵(版画)を投稿していたことが判明した。また、「台法月報」(台法月報社刊)という雑誌に多数の俳句やエッセイも掲載されていることもわかった。しかもその作品数は多数に及び、予想以上に台湾文壇で活躍していたことが明らかになった。

古藤実富については、残念ながら台湾での足跡を確認することはできなかつた。しかし古藤の遺族と接触することができ、雑誌掲載作品だけでなく、未発表作品や直筆の原稿を手に入れた。とりわけ、これまで確認することができなかつた履歴書を手に入れたことで、彼のライフサイクルの大枠が特定できたことは貴重な成果であった。今後の研究を進める上での基礎資料を蓄積し、提供された資料をもとに作品分析と考察ができた点を成果としてあげたい。研究の成果の一部を「古藤実富の児童文学」というテーマで論文にまとめたが、いまだ解明されていない点もあるため、引き続き古藤については調査を進めていくことを課題とした。

戦後、沖縄県内で刊行されていた川平朝申の児童書および自伝的記録である「わが半生の記」を手に入れた。とくに「わが半生の記」を読み進めることで、川平のライフサイクル研究を深めることができた。また、那覇市歴史博物館が開催した「川平朝申と沖縄文化」展示において川平の直筆原稿や児童劇台本等の資料、年譜などを入手できた。その研究成果は、「川平朝申の児童文学」、「日本統治下台湾における川平朝申の児童文学」というタイトルで研究発表を行うことができた。また、沖縄タイムス紙上に4回シリーズで台湾における川平の児童文化活動について情報発信を行い、研究の成果を広く社会に発信することができた。

研究期間全体を通して、戦前戦後というもっとも資料の散逸が激しかった時代の資料発掘のみならず、戦後初期の沖縄児童文化運

動の胎動期の実態、戦後児童文学創作の歩みを、具体的な作品を通して検証できたことが重要な成果としてあげられる。

また本研究課題から派生して、儀間比呂志の作品研究を行った。儀間は、戦後の沖縄で初めて出版された絵本『ねむりむしじらあ』(川平朝申文、儀間比呂志絵、福音館書店、1970年)の挿絵を担当した絵本作家だが、彼には戦前を南洋で過ごし、引き揚げてきた経験があった。台湾引き揚げ者の川平と、南洋引き揚げ者の儀間が共同で制作した絵本が、戦後児童文学の嚆矢となったことは注目に値する。儀間の作品研究を通して、「戦前の南洋を背景とした沖縄児童文学の系譜」についても今後の検討課題と示唆を得られた。またさらに、儀間の絵本については沖縄県うるま市において体験型の絵本原画展を開催し、儀間から絵本制作の背景についても聞き取りを行った。川平も儀間も、沖縄の昔話や伝説を再話、あるいは再創造した作品が中心である。研究の過程では、民話的作品を現代の子ども読者がどう受け止めるのか、あるいはどう手渡していったらよいのかということにも関心が芽生えた。

今後、台湾と南洋という2ルートを視野に入れつつ、戦後沖縄の児童文化・文学の展開過程を明らかにしていくこと、現代的文脈を生きる子どもたちと作品世界を鑑賞していく方法についても実験的に取り組んでいくことの2点を、研究課題としたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

齋木喜美子「沖縄児童文学概観」『日本児童文学』第58巻第1号、日本児童文学者協会編集発行、小峰書店、2012年、pp.26-33

齋木喜美子「古藤実富の児童文化～日本統治下の台湾との繋がりを背景として」『福山市立大学教育学部紀要』第2巻、福山市立大学教育学部編集発行、2014年、pp.31-40

齋木喜美子「儀間比呂志の『沖縄絵本』を読み解く～表現様式の変遷と主題の解明を中心として」『こうさく学』第3号、日本こうさく学研究会編集発行、2014年、pp.35-46

齋木喜美子「体験型絵本鑑賞の試み～『儀間比呂志・絵本の世界』展 2012・2013より」『こうさく学』第3号、日本こうさく学研究会編集発行、2014年、pp.91-99

〔学会発表〕(計5件)

齋木喜美子「古藤実富の児童文学」沖縄文化協会研究発表会、2011年11月、於：早稲田大学

齋木喜美子「川平朝申の児童文学」沖縄文化協会研究発表会、2012年7月、於：沖縄大学

齋木喜美子「現代的文脈における『儀間比呂志絵本の世界』の可能性」沖縄文化協会研究発表会、2012年12月、於：早稲田大学

齋木喜美子「日本統治下の台湾における川平朝申の児童文学」シンポジウム・川平朝申とその時代、2013年3月、於：沖縄県立芸術大学

齋木喜美子「儀間比呂志の沖縄絵本を読み解く」沖縄文化協会研究発表会、2013年7月、於：沖縄県立芸術大学

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕
出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

齋木喜美子(福山市立大学教育学部教授)

研究者番号：30387633

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：